



# うめく「生」

## アフリカ・赤道直下から

—2

遺書があった。

「妻よ、長生きしてくれ。子どもを頼む。子どもたちよ、君たちは母を支える必要がある……」

ウガンダ・カンバラから南へ。赤道を越えてしばらくするとマサカの町に出る。かつては、カンバラに次ぐ大都市だったが、内戦ですっかり荒廃

### 夫との固い約束が……

してしまった。今ではエイズの集中発生地域だ。

この町のテオピスタ・キントウさん(35)は、エイズで死んだ夫の遺書をいつも、ハンドバッグに入れていた。

遺書はボロボロになった大学ノートに、ボールペンで3つも書いてある。

1991年初め、夫に微熱が続いた。検診の結果はエイズだった。そして、キントウさんにも感染していた。4女と1男、



一家そろってのエサやり。母(左端)には「私の死後、子どもたちが自立できるように」と悲痛な願いがこもる  
—ウガンダ・マサカで

# 子どもの自立へ命縮め

告白」であることは理解できた。子どもたちは、どう答えていいのか戸惑い、静かにうなずくだけだった。

それから6年。一家の裏庭で、エマニュエル君(9)とカローリ君(7)が子ブタにイモのツルをやっていた。「よく食べるな、このブタ」と話しかけながら、勢いよく食い散らす姿を見ている。

子ブタは、キントウさんが薬を買わずにためた金で購入した。一度にそんな多くやってはダメよ。飼育法を教えるキントウさんは真剣だ。自分の死後、ブタの売却金で子どもたちを自立させようと考えている

おなかの中に赤ちゃんがいたというのに。この年の7月27日、夫が遺書を手渡した。キントウさんは「子どものこころ明けた。お母さんとは心配しないで」と語

りかけた。翌日、夫は息を引き取った。その死からしばらくして、上の子3人に打エイズの意味が分かったのかどうか。でも、大事な母の「やがて来る死の

な。あなたたちは、早く自分たちだけで生きていけるようになるよ。」

今年(97)のキャンペーンでは国連機関などへの寄付に加え、ウガンダの子どもたちをエイズから救うためのプロジェクトをサポートします。救援金は左記へ郵便振替が現金書留で送金いただくか、直接ご持参下さい。

〒530-051 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)

文 小倉 孝保  
写真 玉置 勝巳

